

陶淵明「詠二疏」詩について

——「知足」の是非——

序

『陶淵明集』巻四に三篇の「詠史詩」が收められている。「詠二疏」、「詠三良」、「詠荊軻」である。この第一篇に當る「詠二疏」は、前漢宣帝の時、“知足”を旨として勇退した疏廣、疏受の叔侄を詠ずるもので、制作時期については諸説あるものの⁽¹⁾、内容については、致仕⁽²⁾歸郷を實行した古人の顯彰という以外、これまでほとんど踏み込んだ考察がなされてこなかった。

小稿ではこの作品について作者淵明の實作意圖を中心に、いくつかの私見を述べてみたい。ここには淵明の思想のみならず、六朝時代の「詠史詩」ならびに致仕をめぐる興味深い問題があるように思われる。

井 上 一 之

一

まず「詠二疏」詩の原文を示しておく。テキストは、汲古閣舊藏本を底本とし、必要に応じて諸本による文字の異同に言及する。

- | | | |
|-----------------------------|----------------------|---------------------------|
| 1 大象轉四時 | 大象 | 四時 ^{しじ} を轉ずるがごとく |
| 2 功成者自去 | 功 | 成なれば自ら去る |
| 3 借問 ^{底本注、一作商} 衰周來 | 借問 ^{このかた} す | 衰周より來 |
| 4 幾人得其趣 | 幾人か | 其の趣を得たると |
| 5 游目漢廷中 | 目を游 ^{うろ} す | 漢廷の中 |
| 6 二疏復此舉 | 二疏 | 此の舉を復す |

- 7 高嘯返舊居 高嘯して舊居に返り
 8 長揖儲君傳 長揖す 儲君の傳
 9 餞送傾皇朝 餞送は皇朝を傾け
 10 華軒盈道路 華軒は道路に盈つ
 11 離別情所悲 離別は情の悲しむ所なるも
 12 餘榮何足顧 餘榮 何ぞ顧るに足らん
 13 事勝感行人 事の勝れしこと 行人を感じしめ
 14 賢哉豈常譽 「賢なる哉」とは 豈に常譽ならん
 15 厭厭閭里歡 厭厭たり 閭里の歡び
 16 所營非近 底本注、一作正。陶詩析義、張自烈評本、陶詩彙注作所務 營む所は近務に非ず
 17 促席延故老 席を促じへ故老を延き
 18 揮觴道平素 觴を揮ひて平素を道ふ
 19 問金 底本注、一作爾 終寄心 金を問ふは、終に心を寄するも
 20 清言曉未悟 清言もて未だ悟らざるを曉す
 21 放意樂餘年 「意を放にして餘年を樂しむ、
 22 遑恤身後慮 身後の慮を恤ふるに遑あらん」
 23 誰云其人亡 誰か云ふ 其の人亡し、と。
 24 久而道彌著 久しくして道 彌々著かなり

陶淵明「詠二疏」詩について（井上）

全體は内容的に大きく三つに分かれる。まず第一段、冒頭六句で、漢の二疏（二人の疏氏）が「功成者自去」という「趣」を會得・實現したことに對する、作者の積極的な評價が示される。續く第二段落八句（7句〜14句）では、史實にもとづきながら、二疏が官を去って郷里へと歸る場面が敘述の中心となる。「祖餞・祖道」（送別の宴）は二疏を象徵するエピソードとして古來名高い。

一方、第三段、最初の8句（15句〜22句）では一轉して歸郷後の晏如たる日々——「近務」（目先の仕事）に勤めることなく、毎日酒食をととのえて故老たちと宴樂する——が描かれる。第19、20句「問金終寄心、清言曉未悟」は、句の構造としてやや分かりにくい⁴が、財産の残りを氣にかける親族たちに教え諭したことを言うのであろう。そして最後の二句において、二疏の示した「道」が時間の経過とともに光り輝く、と結んでいる。

ところで、ここで問題となるのは、本作品が志向するもの、すなわち主題である。最終句に「道」という語があるが、これは具體的に何を指すのか。そもそも「詠史詩」である以上、單なる歴史事實の敘述（散文の韻文化）に止まらず、そこに作者独自の評價が含まれているはずである。そうであれば、

中國詩文論叢 第二十四集

この詩の中で作者淵明の獨創性はどこにあるのか。また、二疏説話の評價史において本詩はいかなる價值を有するのか。こうした一連の問題を考える場合、本詩の素材となった史實との對應關係を確認しておくことがまず必要であらう。

二

二疏の傳記資料として現存最古にしてかつ完備したものは、班固の『漢書』である。「疏廣傳」には次のような記載が見える。

疏廣字仲翁、東海蘭陵人也。少好學、明『春秋』、家居教授、學者自遠方至。徵爲博士太中大夫。地節三年、立皇太子。選內吉爲太傅、廣爲少傅。數月、吉遷御史大夫、廣徙爲太傅。廣兄子受字公子、亦以賢良舉爲太子家令。受好禮恭謹、敏而有辭。宣帝幸太子宮、受迎謁應對、及置酒宴、奉觴上壽、辭禮閑雅、上甚謹説。頃之、拜受爲少傅。……(中略)……在位五歲、皇太子年十二、通『論語』・『孝經』。廣謂受曰、「吾聞『知足不辱、知止不殆』、『功遂身退、天之道』也。今仕官至二千石、宦成名立、如此不去、懼有後悔。豈如父子相隨出關、歸老故鄉、以壽命終、不亦善乎？」受叩頭曰、「從大人議。」

即日父子俱移病。滿三月賜告、廣遂稱篤、上疏乞骸骨。上以其年篤老、皆許之、加賜黃金二十斤。皇太子贈以五十斤。公卿大夫故人邑子設祖道、供張東都門外、送者車數百兩、辭決而去。及道路觀者皆曰、「賢哉二大夫！」或歎息爲之下泣。

廣既歸鄉里、日令家共具設酒食、請族人故舊賓客、與相娛樂。數問其家金餘尚有幾所、趣賣以共具。居歲餘、廣子孫竊謂其昆弟老人廣所愛信者曰、「子孫幾及君時頗立產業基趾、今日飲食費且盡。宜從丈人所、勸説君買田宅。」老人即以閒暇時爲廣言此計。廣曰、「吾豈老諄不念子孫哉？顧自有舊田廬、令子孫勤力其中、足以共衣食、與凡人齊。今復增益之以爲贏餘、但教子孫怠惰耳。賢而多財、則損其志。愚而多財、則益其過。且夫富者、衆人之怨也。吾既亡以教化子孫、不欲益其過而生怨。又此金者、聖主所以惠養老臣也。故樂與鄉黨宗族共饗其賜、以盡吾餘日、不亦可乎！」於是族人說服。皆以壽終。

(卷七十一、疏廣傳第四十二)

通讀して明らかなように、淵明の「詠二疏」は部分的に作者の想像的加筆を織り交ぜながら(11、12、15句等)基本的には、『漢書』疏廣傳の記載をほぼ忠實に襲っていることが改めて確認されよう。

しかしながら、ここに一見小さくない違いが一つ見えることは注意されてよい。それは第22句「遑恤身後慮⁽⁵⁾」である。この句のディクシオンが『詩經』に由来することは、つとに注釋書類の指摘するとおりである。『詩經』「邶風」谷風に、

我躬不閱 我躬 閱れざるに

遑恤我後 遑ぞ我が後を恤へんや

とあり、鄭玄の箋は「我身尙不能自容、何暇憂我後所生子孫也」とパラフレーズする。すなわち、「遑恤我後」とは「自分の死後に生まれる(あなたの)子孫を心配してやらない」ということであり、それに基づく本詩の「遑恤身後慮」とは、死後のこと全般というよりは、より具體的に、子孫のための謀を考慮しない、という意味を表すわけである。

とすれば、この句は史實と明らかに齟齬することになる。なぜなら『漢書』には「吾豈老諍不念子孫哉?」とあり、その後文「賢而多財、則損其志。愚而多財、則益其過」云々を見ても、二疏が子孫の行末を深刻に案じていることは疑いないからである。

もともと本詩が別の史料に基づいて制作された可能性も否

陶淵明「詠二疏」詩について(井上)

定できない。しかし、二疏に關する漢代以後のコメントがいずれも『漢書』の記述の範圍に止まっていること(即ち別傳が廣く行われていた可能性が低いこと)、淵明が他の作品を作るうえで『漢書』を参考にしていること、⁽⁶⁾淵明の作と傳える「集聖賢羣輔錄」上(『陶淵明集』卷九)の二疏の條に『漢書』を出典として擧げていること——等を總合的に判斷すれば、淵明が『漢書』二疏傳を讀んでいたこと自體はほぼ動かしがたい。

そしてこの推測の正しさは、本詩の先行作品として知られる、西晉の張協「詠史詩」からも裏書される。

張協 「詠史詩」

(『文選』卷二十二)

昔在西京時	昔在 西京の時
朝野多歡娛	朝野に 歡娛多し
藹藹東都門	藹藹たり 東都の門
羣公祖二疏	羣公 二疏を祖す
朱軒曜金城	朱軒 金城に 曜き
供帳臨長衢	供帳 長衢に 臨む
達人知止足	達人は 止足を知り
遺榮忽如無	榮を遺つること 忽として無きが如し

中國詩文論叢 第二十四集

抽簪解朝衣
 散髮歸海隅
 行人爲隕涕
 賢哉此丈夫
 揮金樂當年
 歲暮不留儲
 顧謂四坐賓
 多財爲累患
 清風激萬代
 名與天壤俱
 咄此蟬冤客
 君紳宜見書

簪を抜き朝衣を解き
 髪を散じて海隅に歸る
 行人 爲に涕を隕す
 賢なる哉 此の丈夫、と
 金を揮ひ當年を楽しみ
 歳暮も 儲を留めず
 顧て四坐の賓に謂ふ
 多財は愚を累はすを爲す、と。
 清風 萬代に激し
 名は天壤と俱なり
 咄たり 此の蟬冤の客
 君が紳に 宜しく書せらるるべし

ここでは全篇、『漢書』の記載に依據しており、したがって「子孫を念う」二疏が描かれている。そうであれば、本詩と同じ題材を共有する先行作品であり、しかも後年『文選』に選錄される、この詩を淵明は、當然讀んでいたはずである。というよりも、實作において強く意識していたと考えるのが自然であろう。實のところ唐以前の「詠史詩」は、題材、モチーフともにかなり固定化しており、その制作は先行作品と

の（時間を超えた）競作である面が強いからである。⁽⁷⁾
 そうしてみると、本詩は「詠史」の基礎資料として『漢書』に依據しながら、そこに記載される史實を意圖的に逆の方向に書き改めていることが理解されよう。「歴史上の事跡に基づいて、それへの評價を述べるもの」が「詠史詩」というジャンルであるとするなら、史實から比較的自由な、こうした作品をはたして「詠史詩」と呼びうるのか、やや疑問であるが、少なくとも作者淵明においては、張協「詠史詩」の系譜に連なる作品として認識されていたと思われる。それはともかく、ではなぜ淵明は史實に修正を加えたのか、または加えねばならなかったのか。「子孫を念う」二疏から「子孫の將來を案じない」二疏への人物像の改鑄は何を意味するのだろうか。次にこの問題を考えてみたい。

三

淵明が二疏の傳記に修正を加えた理由を推測するうえで一つのヒントとなるのは、當時における二疏自體の社會的評價である。

疏廣、疏受の叔侄は、青史に名を留めるほどの顯著な功績を遺さなかったにもかかわらず、古代においてかなり著名で

あったらしく、魏晉南北朝時代を通じて数多くの言及例を見出すことができる。その大部分が賞賛、もしくは肯定的評価である。

①西晉・羊祜「與從弟書」

吾以布衣、忝荷重任。每以尸素爲愧、大命既隆、唯江南未夷。此人臣之責。是以不量所能、畢力吳會。當憑朝廷之威、賴士大夫之謀、以全克之舉、除萬世之患。年已朽老、既定邊事。當有角巾東路、還歸鄉里、於墳墓側爲容棺之墟。假日視息、思與後生味道。此吾之至願也。以凡才而居重位。何能不懼盈滿以受責邪。疏廣是吾師也。聖主明恕、當不奪微志爾。

〔藝文類聚〕卷二十一

②西晉・華譚「上賤求退」

譚聞霸王遠聽、以求才爲務。僚屬量身、以審己爲分。故疎廣、告老、漢宣不違其志。干木偃息、文侯就式其廬。譚無古人之賢、竊有懷遠之慕。自登清顯、出入二載、執筆無贊事之功、拾遺無補闕之績。過在納言、聞於舉善。狂寇未賓、復乏謀策。年向七十、志力日衰、素餐無勞、實宜辭退。謹奉還所假左丞相軍諮祭酒版。

〔晉書〕卷五十二、華譚傳

③東晉・王彪之「五言詩序」
余自求致仕、累詔不聽。因扇上有二疏畫、作詩一首、以述其美。

〔太平御覽〕卷七五〇

④梁・沈約「致仕表」

徒以桑榆無幾、時制行及、不朝之禮、忽在今辰。使反身敝廬、待終窮巷。臣又聞之、懸車散髮、其來舊矣。昔廣德請骸、義在量力。二疏知止、懼貽後悔。數年以來、稍就盡竭、氣力衰耗、不自支持。……

〔藝文類聚〕卷十八

ここに見えるように、魏晉南北朝における二疏への言及はほとんどすべて致仕または知足・知止に關するものであり、その政治的業績に觸れるものは皆無に等しい。そして①、②、④に代表されるように、當時致仕を申請するさいには二疏を引用することが典型的なパターンであった。つまり、二疏と言えは致仕である、と同時に、致仕と言えは二疏であったわけである。

では、なぜ二疏なのか。漢代に限定しても、彼ら以外に数多くの政治家・官僚が退休しているにもかかわらず、ひとり二疏だけが注目を集めるのはそれなりの理由があるはずであ

中國詩文論叢 第二十四集

る。それはおそらく、二疏が漢代にあってもっとも圓満に退職を果たした、初期の人物であるからだと思われる。④に見える薛廣徳らが皇帝に代わって失政の責任を取るかたちで致仕（辭職）したり、老病の故にやむなく致仕したりするものが多いなかで、理由らしい理由もないまま辭職を願ひ出て（底本『陶淵明集』「集聖賢羣輔錄」上の注では、この時、廣は年六十七であつたとする）それが許されたばかりか、黄金七十斤を賜り、盛大な送別の宴を催してもらつたことはまさに特例に屬するであらう。

そしてこれに加えて、魏晉南北朝時代特有の事情がある。當時の史書を繙くと、とくに南朝において、繰り返し致仕を申請しても許されない、という事例がしばしば見られる。當時の門閥貴族たちは官職に清濁の分を設け、繁忙な職務を好まず、頻りに口實を作つては解職または致仕を申し出る場合が少なくない。寒門士族と異なり、大規模な莊園を擁する彼らは、官吏の俸祿に頼ることなく十分に生活できるだけの經濟的基盤をすでに獲得していたからである。しかし、脆弱な權力基盤に立つ南朝の皇帝たちにとって、自らの權力を維持するためにも、人心を掌握するためにも、門閥貴族を朝廷に引き留めておくことは必要不可欠であつた。また致仕を慰留

することは、貴族たちへの信頼や厚情を示すことにもなる。⁽¹⁰⁾こうして致仕を切望する臣下とそれを拒む君主という、ある種倒錯した狀況が現れることになった。②に見える華譚（二五五―三二二）も致仕を願ひ出たが、結局「聽されず」、王彪之（三〇五―三七七）も致仕の申し出を重ねて拒絶されたことは③に自ら記している通りである。彼らの目から見れば、二疏の（圓満退職の）美談の最大の貢獻者は、二疏自體でなく、二人の同時退職を許した漢の宣帝だと言っても過言ではない。②に「疎廣告老、漢宣不違其志」とあるのは、このことを述べたものである。

こうして見ると、魏晉南北朝時代、二疏が頻繁に言及されるという現象に、當時の特殊な社會狀況が色濃く反映していることがよく理解されよう。致仕が事實上困難な狀況であればあるほど、二疏の美談は價值を持ち、注目を集めるようになる。そうであれば、二疏に對する、當時の人々の感情は、その人格への敬慕・崇拜というよりは、境遇への憧憬・羨望と言つた方が實情に近いかもしれない。

一方、二疏の行爲を批判する立場もわずかながら存在する。興寧（三六三―三六五）の初、前燕の慕容恪、慕容評の兩名は、自然災害による被害の責任を取るべく辭職を申し出る。

その際に主君、慕容暉が慰留・説得したのが次の文である。

⑤朕以不天、早傾乾覆、先帝所託、惟在二公。二公懿親碩德、勳高魯衛、翼贊王室、輔導朕躬、宣慈惠和、坐而待旦、虔誠夕惕、美亦至矣。故能外掃羣凶、內清九土、四海晏如、政和時洽。雖宗廟社稷之靈、抑亦二公之力也。今關右有未賓之氏、江吳有遺燼之虜、方賴謀猷、混寧六合、豈宜虛言謙沖、以違委任之重。王其割二疏、獨善之小、以成公旦復袞之大」

〔晉書〕卷百十一「載記」慕容暉傳

ここに見える「割二疏獨善之小、以成公旦復袞之大」という句は、さきに恪、評が「臣雖不敏、竊聞君子之言、敢忘虞丘避賢之美、輒循兩疏知止之分」と述べたのに對應したもの。つまり、いかに「知止・知足」といっても、なおやり遂げるべき任務が残されている以上、(二疏のような)辭職・引退は「獨善」に過ぎないというわけである。これは「經世濟民」を第一義に考える儒家の立場からして當然ありうる批判と言えるだろう。

だが、これよりも更に辛辣なのは、他ならぬ『漢書』「二疏傳」を作った班固の言葉である。その「贊」には次のよう

陶淵明「詠二疏」詩について(井上)

に言う、

⑥贊曰、雋不疑學以從政、臨事不惑、遂立名迹、終始可述、疏廣行止足之計、免辱殆之案、亦其次也。……

〔漢書〕卷七十二

雋不疑は昭帝の時、謹嚴實直に任務を遂行し、青州刺史、京兆尹を歴任した後、病氣に因って辭職した人物である。始元五年(前82年)、戾(衛)太子、劉據と自稱する人物が都に現れた際、眞贋の見分けがつかずに困惑する人々の中で、ひとり不疑だけが、いずれにせよ戾太子は犯罪者だとして、直ちに捕捉して監獄へ送った。後にそれが占い師(成方遂)の詐稱であったことが分かると、適切な處置を施した不疑の名聲は自ずと高まったという。贊に言う「臨事不惑、遂立名迹」とはこのことを指す。

ここで班固は、不疑に比べて、「恥辱と危険を免れる」だけの疏廣は一等級劣る、とする。たしかに、眼前の事態に對して冷靜沈着を保ちつつ適切に對處する生き方と、不測の事態を恐れて逃避する生き方と、どちらがより積極的であるかは、誰の目にも明らかであろう。「知足」とは言うものの、

中國詩文論叢 第二十四集

その實態は、よく言えば深謀遠慮に長ける、悪く言えば、過剰に危機管理意識が高い、ということである。危機管理にせよ、自己保全にせよ、それはあくまでも手段であって、目的ではない。古代において隱遁者は数多いが、彼らは正義を實現するためであったり、自由を獲得するためであったり、また好機を待ったためであったりと、最終的な目的を叶える手段として隱遁という途を選択している。だが、二疏の隱遁_〓致仕は、自由の獲得という結果は得たものの、「辱殆を免れる」という以外、當初から確たる目的を持っていないわけである。さて、ここに至って淵明の意圖がようやく明らかとなる。それは、從來から二疏（の生き方）に與えられてきた消極的評價——直接には班固の解釋——に對する異議申立てであつたと考えられる。

さきに見たように、『漢書』「疏廣傳」には、「早期引退」と「散財宴樂」という二つのエピソード（他にもう一つ、「太子の外祖父が二疏を差し置いて自分の弟を太子の監護役に就けようとした際、外戚だけに親しむのはよくないと反對した」というエピソードが前文にあるが、これはさほど重要ではない）が置かれている。前者は「如此不去、懼有後悔（今辭めなければ、きっと後悔する）」という、不慮の事故を回避するための行爲であり、

後者は「不欲益其過而生怨（子孫にいま以上の過失を犯させ、彼らに對する人々の怨恨を増やしたくない）」という、疏氏一族に對する——愛情というよりは——深謀遠慮のもとになされた行爲である。そして、この二つは作者班固の意識において、「未來に對する危機管理」という點で共通する主題をもつエピソードであつた。

しかし、二疏に否定的な班固の評價・解釋を保留して、原史料を活かしつつ、二疏の事跡に對する再評價を試みようとする者にとっては、二つのエピソードの關係性、とくに後者をどう解釋するかが大きな問題となってくる。そこで張協は、「揮金樂當年、歲暮不留儲。……清風激萬代、名與天壤俱」として、「貴」（社會的地位・名譽）のみならず、「富」（財産）を顧みることのない、高潔な隱者としての二疏像を創出・提示した。これに對して、異なる價值觀（後述）のもとに、「子孫の將來を顧みない」、すなわち危機管理を最重要に考えない二疏像を強調したのが淵明である。たしかに「揮金（散財する）」という行爲自體は、子孫に財産を遺さない、という意味において、子孫のためであるとも、自分のためだけであるとも兩様に解釋できる、兩義性をもっている。

とはいえ、後者のエピソードを再解釋しても、前者のエピ

ソードをそのままにしておけば論理的整合性が破綻をきたすのも事實であろう。實は、「詠二疏」詩にはもう一つ、修正の跡がある。それは冒頭の二句である。

二疏が切迫した状況もなく、突然引退を決意した主要な根拠は、『漢書』に依る限り、「知足不辱、知止不殆」と「功遂身退、天之道」という言葉の存在である。この二つはともに、「持盈」（盈ち足りた状態を維持しようとする）の誠めとして『老子』（四十四章、九章）に見える。

これに對して淵明は、「大象轉四時、功成者自去」という再解釋を行っている。これは『韓氏易傳』を出典とする表現であろうと思われる。⁽¹⁾

又引『韓氏易傳』言、「五帝官天下、三王家天下。家以傳子、官以傳賢。若四時之運、功成者去、不得其人則不居其位。」

（『漢書』卷七十七「蓋寬饒傳」）

一見すると見過ごされやすいが、淵明は『老子』から『易』へと變換することで、消極的な「持盈」の「處世訓」を、積極的な「退讓」の道德へと昇華する。すなわち、二疏は季節が運るように、高位に踏み止まることなく、それを後の者へ

陶淵明「詠二疏」詩について（井上）

譲った、と見なすわけである。本詩に「趣を得る」というのは、この点を指すのであろう。これは小さな修正でありながら、大きな價值轉換・再解釋と評してよい。

こうして考えてみると、「詠二疏」詩における史實の修正が二疏の再評價にとって必然的であることがよく理解される。先行する張協が「達人知知足、遺榮忽如無」と、（高潔な）人生の「達人」という見方を示したのに對して、淵明は、人生の大きなサイクルに身を任せ、「退讓」の道に従った人物として二疏を読み直したのである。

四

最後に残った問題は、本詩執筆の動機である。淵明はなぜ二疏を取り上げたのか。二疏と淵明は、引退歸郷という點で共通するものの、二疏は三太（太傅）にまで昇り詰めた高官であって、官途に挫折した淵明がこれらに自己投影を行ったとは考えにくい。共感を生むには兩者の境遇の間に、あまりにも懸隔がありすぎるのである。

この問題（執筆の意圖、主題）に關しては、これまでに大別して三つの説が出されている。

中國詩文論叢 第二十四集

A. 二疏の「知足・知止」に共感し、そこに人生の「趣」を見出した、とする説

「趣」字最宜領會。功成而不歸去、不得趣者也。古今得其趣者、曾有幾人？惟二疏知足知止、所以得趣、惟其得趣、所以散金置酒、不以多財遺子孫也。「趣」字實貫徹前後。

（清・溫汝能『陶詩彙評』卷四）

B. 功績を挙げながら引退しない者を暗に批判した、とする説

本詩歌頌二疏功逐身退、從側面抨擊了功成奪國者。

（孫鈞錫『陶淵明集校注』（一九八六年、中州古籍出版社）

C. 二疏の「揮金」に共鳴した、とする説

先生託慕二疏、在不留金、以爲得處貧之道。

（丁福保『陶淵明詩箋注』所引、程穆衡『陶詩程傳』

このうち最も妥當だと思われるのはC説であろう。A説に

ついで言えば、淵明は張協とは異なって「知足／知止」という語を避けており、しかも「揮金」のエピソードは「知足」と無関係である。またB説の通りであるとすれば、致仕・引退の適切さを強調するには二疏よりも、他の人物、たとえば范蠡や張良の方が一層適切であろう。范蠡や張良になく、二疏にあるもの。それは「揮金」である。

淵明はこの「揮金」という行爲に強い關心を持っていたらしく、その詩のなかでしばしば言及している。

雖無揮金事 金を揮ふ事無しと雖も
濁酒聊可恃 濁酒 聊か恃むべし

（『飲酒』其十九）

傾家時作樂 家を傾けて時に樂しみを作し
竟此歲月駛 此の歲月の駛するを竟へん
有子不留金 子有るも金を留めず
何用身後置 何ぞ用ゐん 身後の置を

（『雜詩』其六）

このように淵明が「揮金」に興味を示すは、そこに人生の

眞理が含まれているからにはかならない。それは一つには、「作樂」〔雜詩〕其六〕という意味において「今を充實させる」という機能をもっている。その大前提となるのが、人生の一回性と有限性である。

得歡當作樂
斗酒聚比鄰
盛年不重來
一日難再晨
及時當勉勵
歲月不待人

歡を得ては當に樂しみを作すべし
斗酒もて比鄰を聚めん
盛年 重ねて來らず
一日 再び晨なり難し
時に及んで當に勉勵すべし
歲月 人を待たず

〔雜詩〕其二

從古皆有沒
念之中心焦

古より皆没する有り
之を念へば中心 焦がる

〔己酉歲九月九日〕

一生復能幾
倏如流電驚
鼎鼎百年內

一生 復た能く幾ぞ
倏かなること流電の驚くがごとし
鼎鼎たる百年の内

陶淵明「詠二疏」詩について（井上）

持此欲何成 此を持して何をか成さんと欲する

〔飲酒〕其三

このように人生がせいぜい百年という短い期間に限定され、しかも一度過ぎ去った時間は引き戻すことができないとすれば、「今」という時を十分に樂しむことがなによりも大切なことになる。將來に備えて「金」を保留したところで、死没すればもう役には立たない。「詠二疏」詩に「放意樂餘年」と言う所以である。

だが、「揮金」のより重要な意義は、むしろもう一つの點——「財産を子孫・一族に残さない」という意味において、「誰のためでもなく」自分の人生を樂しむ」という點にこそあるように思われる。淵明には、子供の將來を氣に掛ける「責子」のような諸諒の作があるが、代表作「形影神」詩には次のように言う、

適見在世中 適たま世の中に在りと見るも

奄去靡歸期 奄ち去りて歸期 靡し

奚覺無一人 奚ぞ覺らん一人無きを

親識一作感 豈相思 親識（感）も豈に相ひ思はん

中國詩文論叢 第二十四集

但餘平生物

但だ平生の物を餘すのみ

舉目情悽淪

目を舉ぐれば情 悽淪たり

(形影神・形贈影)

この世から一人いなくなったところで氣づくものはいない。家族や親戚でさえも自分を思い續けてはくれないのだ――。

幾たびかの仕官と辭任を繰り返すなかで官界への絶望を感じた淵明にとって、最後の據り所となったのは家族であつたはずである。しかし、人は獨りで生まれ、獨りで死に去く、という本來的な孤獨を覺悟すれば、家族(子孫)も結局、據り所とはならないことに氣づかざるを得ない。こうした諸觀に至るとき、自分のために自らの人生を楽しむこと、すなわち「揮金」が積極的な價值をもつわけである。前掲、「雜詩」其六に「有子不留金、何用身後置―子供はいるが金は残さない、死後の子孫のことなどどうでもよいからだ」とあるのも、子孫を案じる、『漢書』の二疏像を批判的に受けとめた上で、改めて「揮金」の意義を指摘したものにはかならない。

こうして見ると、數多くの致仕者のなかから、淵明がなぜ二疏を取り上げたのか、その理由がある程度納得されるだろ

う。致仕の後、二疏は特に何をするでもなく、ひたすら「揮金」して日々を楽しんだ。それは朝廷(國家)、官界(組織)、家族のためではなく、限りある自分の余生を存分に楽しむ、ということであり、淵明はそこに人が進むべき「道」を見出したのである。程穆衡(C)の述べるように、淵明は貧困の中にあつて、いや貧困であればこそなおさら「揮金」することの大切さを實感したのであろう。

結 語

以上、淵明「詠二疏」詩に見える「遑恤身後慮」の句をめぐって、關連するいくつかの問題を論じてきた。

主要なポイントを挙げれば、次のようになろう。

① 一見無關係に見える「早期引退」と「揮金宴樂」の二つのエピソードは、原著者班固の意識において、「危機管理」という點で通底していた。

② 『漢書』に取材して「詠二疏」詩を作成する詩人にとっては、二疏、とくに「知足」に對する班固の否定的評價を覆す必要があり、張協は「高潔な隱者」として、淵明は「退讓の禮を行った人物」として二疏を読み直した。

③本詩執筆の直接の動機は、二疏が「揮金」したことにあり、淵明はこれを「家族のためではなく、自分のために余生を楽しむ」とことと解釋し、人生の「道」として意義づけた。

思えば、淵明が生きた東晉時代は、王・謝を代表とする門閥貴族が勢力を誇った時代であり、その社會の根幹をなすものは家族本位制であった。榮辱は個人のもではなく、一族のものであったのである。それだけに、「個人主義」とでも呼ぶべき、淵明のこうした考えが、當時いかに異色であったかが想像できる。かれの「詠二疏詩」とくに「遑恤身後慮」の句は、家族主義を當然として疑わない、同時代の讀者たちに大きな違和感ないし衝撃を与えたであろう。

注

(1) 本詩の制作時期については、以下の三つの説が有力である。

- ① 零陵王が殺害された宋・永初二年(四二二)前後(淵明、五十七歳)。
- ② 景平元年(四二三)(五十九歳)。
- ③ 元興二年(四〇三)(三十九歳)。

陶淵明「詠二疏」詩について(井上)

いずれも「詠史」三首を同一時期の作と見なすことでは共通している。筆者の立場は「詠史」三首は連作であり、「個人と集團・組織」という思想的論點を含む事件が契機となっている可能性が高い、と考える。

(2) 中國國家圖書館藏『陶淵明集』(北京圖書館出版社、二〇〇三年、中華再造善本・唐宋編・集部)を底本とする。

(3) 「近務」は、唐以前にあってきわめて用例に乏しい語である。管見の限りでは、『三國志』「吳書」卷五十五の裴松之注に「孫盛曰『……是以先王建德義之基、恢信順之宇、制經略之綱、明貴賤之序、易簡而其親可久、體全而其功可大、豈委瑣近務、邀利於當年哉……』」とある。ひとまずこれに従って「目先の仕事」と譯しておいたが、校語に示したように、各種宋本では「一作止」としており、原本では「正務」であった可能性も否定できない。

(4) この二句については解釋が分かれる。通説は、「子孫たち、(人に託して)金について質問するのは終始その殘金に關心を寄せるからだ、それに對して二疏は清らかな言葉でその不明を諭した」というもの。だが、①一聯の上句の主語を「子孫」または「昆弟老人」とし、下句の主語を「二疏」とするのは、不自然であること、②『漢書』「二疏傳」には「數問其家金餘尚有幾所」とあり、二疏自身が「問金」していること―等から、斯波六郎『陶淵明詩譯注』(北九州中國書店、一九八一年再版)では、「疏廣は日日歡飲しながら、

中國詩文論叢 第二十四集

しばしば家人に『お金はまだどれくらゐ残つてをるか』と問うたといふが、金を問ふのはつまるところ金に心があるのだが、しかし、子孫の爲に田宅を買へとすすめられたとき『賢にして財多ければ……』という俗氣はなれの言葉で、人人のがてんしかねた點をわからせてやった」と解釋する。これに従えば、二疏が金に執着していることを批判する文意となる。また一方、第19句の「終寄心」を「金に執着する・心配する」意でなく、「本心を打ち明ける」とする解釋もある。「因爲子孫託人問金、最後向人托出他的全盤心思」（逯欽立『陶淵明集』（中華書局香港分局、一九八七年））。この解釋であれば一聯の主語は二疏で統一されるが、一句中で主語が変わることになり、やや分かりにくい。いまはひとまず通説に従つておく。

- (5) 「逴恤身後慮」について、逯欽立『陶淵明集』では「慮」は「恤」と重複する」と言うが、徐復『陶淵明集』舉正』『徐復語言文學論稿』（江蘇教育出版社、一九九五年）所收）は「慮は謀の意であるから、恤とは重複しない」と反論する。ひとまず徐説に従う。

- (6) 淵明が「讀史述九章」を作るにあたって「漢書述」をモデルとしたことは、松浦友久「陶淵明の『讀史述九章』について―その文體的系譜と實作意圖―」（『日本中國學會創立五十周年記念論文集』、一九九八年）に詳論されている。

- (7) 漢魏晉南北朝時代の詠史詩（篇題に「詠」と題するもの）

のうち現存する作品は23首ある。これを題材別に分類すると、以下の通り。

荊軻4首、三良3首、二疏2首、魯仲連（十段干木）2首、許由1首、莊子1首、蘇秦＋李斯1首、李牧1首、嚴君平1首、淳于緹縈1首、司馬相如＋主父偃＋朱買臣＋陳平1首、汲黯1首、楊惲1首、馮唐1首、揚雄1首、題材なし1首

このうち西晉・左思の作が9首を占めるので、班固に始まる詠史詩は六朝時代、量的にあまり大きな發展を示さなかったと言えるだろう。そのなかで、荊軻の4首と、三良の3首は注目し値する。

- (8) 淵明の「詠二疏」、「詠三良」、「詠荊軻」はいずれも、題材を同じくする先行作品があり、それらは一様に「詠史詩」と題する。もし通説の通り、淵明がこれらの作品を同一時期に作ったとするなら、ジャンルのな枠組みがあったと考えるのが自然であろう。

- (9) 唯一、西晉・裴頠（二六七―三〇〇）の「辭專任門下事表」（『晉書』卷三十五）に「昔疎、廣、戒太子以舅氏爲官屬、前世以爲知禮」とある。

- (10) このあたりの事情と實例については、沈星棣・沈鳳舞『中國古代官吏退休制度史』（江西教育出版社、一九九二年）第三章に詳しい。

(11)

『韓氏易傳』という書物については、『漢書』卷十「藝文志」に『易十三家』として「韓氏二篇。名嬰」とあるのを指すように思われる。同書の卷八十八「儒林列傳」に「韓嬰、燕人也。孝文時爲博士、景帝時至常山太傅。……韓生亦以『易』授人、推『易』意而爲之傳。燕趙間好『詩』、故其『易』微、唯韓氏自傳之。……司隸校尉蓋寬饒本受『易』於孟喜、見涿韓生（嬰の曾孫）說『易』而好之、即更從受焉」とあり、蓋寬饒は嬰の子孫の生から『韓氏易傳』を教授されたことが分かる。しかし唐代までに「」びていたらしく、『隋書』『經籍志』には著録していない。なおいくつかの陶詩注釋書では、『史記』卷七十九「蔡澤傳」の「夫四時之序、成功者去」を出典とするが、ここでは採らない。その理由は第一に、本詩では「成功者」でなく、「功成者」に作っていること。第二に、蔡澤の發言の意圖は、自らその位（秦相）に就くために相手に引退・交代を求めることにあり、自ら引退を決意した二疏とは文脈が異なるからである。